

第百話

頼光朝臣総州下向事付ト部季武事

『前太平記』上 卷第十五 三〇四頁から三〇八頁より

源頼光朝臣、判官代の功勞から上総守に任ぜられた。お供には源次綱をはじめ、御家人たちを清々しく出発させて、今年八月十一日に都を立ち、東海道に差し掛

御家人等爽やかに出で立たせて、

かって、上総に下向しなされたのだった。

[綱、季武の搜索を頼まる]

さて、満仲朝臣の老臣・ト部季国次官が、こっそりと綱をお呼びして申し上げた事は、「私は年をとって、寿命も差し迫っている。愚息でございます季武は、弓馬

「我齡傾きて 命終旦暮に迫れり。

の腕においては、そこまで人に笑われるほどのこともしでかしはしないはずと思

弓馬の道に於いては、 さまで人に笑はるゝ程の事も、 仕出だすまじく思ひ成して候ひしに、

い込んでいましたが、甲斐のないことで、過ぎ去った康保の頃、どことも知れずいなくなってしまう次第で、我ながら、あまりに浅はかな行いだと思い、心の

中で悔やんで悲しむこと、片時も忘れることはない。そのようにいっても、世間体が邪魔をして、まだ罪を許していないのですが、近頃ある者が、東国の方で、(季

未だ宥免の沙汰をも致さず候が、

武を)見たと噂を申し上げたが、人のそしりを恥じて、わざと聞かないふりでいましたが、年老いて精も衰えて、しかも一子のことでございますので、いよいよ心惹かれる思いのあまり、嘲笑されることも忘れて (→承知で)、申し上げるのでございます。この度の下向の旅のついでに、もしかしたら季武の居所が見つかり、(噂が) お耳に入るようならば、貴方のご親切心をもって、私のこの会いたい思いを伝

貴方の御芳志を以て、

我が愛慕の情を伝へ、

え、私が生きている間に、もう一度父子の再会をさせていただきたいのです」と、涙と共に申し上げたのだった。綱も卜部の有様を見て哀れと思ったので、一緒に涙を流して、「なるほど、父の子に対する慈愛とはそういう貴方のようなものでございます。このことに関してはどうしていい加減なことを思いましようか。とりわけ、私は幼少の時から孤児となって、成長するにつれて、両親を恋い慕う涙が袖を濡らして滴るほどといっても、まったくそれは無駄であった。私の物寂しさと比較して、さぞかしと季武殿という賢息様のご心中も思いやられます。地を掘っても探し出し、会わせてさしあげます」と、差し支えなく承諾したところ、季国はいかにも嬉しそうに少し笑い、「嬉しいことを仰る方ですな。確かにお願い申し上げます」

と、手を合わせて申し上げた。そうすると綱も京を立った日から、それぞれの宿での旅のその日その日で、季武の居場所を探したのだった。季武も父のお叱りを受けてからは、伊豆国の足柄山の麓の縁ある律院に隠れ早七年を送っていた。常に故郷を恋しく思い、なんとかして父の存命の間に今一度許しの言葉を聞き、その顔を見たいと指を折って父の年を数えていたところ、今年は七十九歳である。余命も早くも残りなく少なく思われたので、いっそう辛くてこの国の三島明神(老)に毎日参詣し怠けることなく、「父の寿命が長く、生きているうちに再会を許してください」と、真心を込めて祈ったのだった。ところが、今度頼光朝臣が上総国の任におもむき下向なさると聞いて、「ああ、幸いなことよ。お宿に参上して、家臣の方々に

「哀れ 幸いかな。 御料亭に推参して 御内の人々を憑みて、

頼んで、私のこの心配を申し上げて、弁明しよう」と、準備をして、じっと待つて

我が此愁眉を申し発かん」

いたのだった。

【季武、綱に見出さる】

こうして、頼光朝臣が同月二十日に、伊豆の国府に到着なさり、お宿を指定して宿泊なさる。綱は季国が頼んだ一言を守って、形式通り探し求めたが、その日の暮

形の如く尋ね求めけるが、 其日の暮れ程に

れ程に、お供の雑人と宿の主人の下男たちが、宿の門外で大きな声で言い争い、杖

御供の雑人、並びに主の長が下部共、 料亭の門外にて高声に諍ひ鬪り、

か鞭を(持ってこい)と騒ぎ立てている。綱が不審に思い、表にでて、事の次第を

杖よ答よと騒ぎひしめく。 綱不審に思ひ、 立ち出でゝ事の様を聞くに、

聞くと、卜部季武が門外まで押しかけてきたが、昔と違う自分の姿が、季武と名乗
って言い出すことも恥ずかしくて、笠を深く被ってあちこちふらふらしていたた

彼方此方と徘徊居たりし故、

め、下男たちが不審と思い、「何者だ。用があるように振る舞うのは不審である」

下部共見怪しめ、 「何者なれば、 用ありげに振舞ふこそ不審なれ」

と責めたところ、いっそう気後れして、また言い出すことも出来なくて、「いや、

いとゞ心臆して、 「いや

差し支えない(→別に、無用な)者だ」と言って、名乗るのをこらえるが、さらに怪

苦しからぬ者」

しんだところ、一人連れ立っている召使いの男が、宿の下男の袖をとって、小声で

一人具したる中間の男、 長の下部が袖を叩へ、

申し上げたことは、「頼みとしている人は、都の人でございますが、今夜お泊まりの貴人の人にお目にかかりたい事情があって、ここまで参上しているのでございます」と申し上げたところ、雑人どもは、これを聞いて、「ならば、こいつは曲者

「さればこそ 癖者なれ。

である。そういう事情ならば、はじめから言うはずなのに、責められて今頃になっ

其儀ならば 始めよりこそ云ふべきに、 咎められ今に成りて、

て、そう言うことは、きっと泥棒である。それ、そいつを取り逃がすな」と追いま

さ云ふは 必定盗人なり。 其余すな」

わし、雑人の欠点として、分別なく自分勝手に大声をあげて騒ぐのであった。渡部

雑人の癖として、 筋もなく我がちに騒ぎ匂るにてぞ有りける。

は屋敷の中から、これを聞いて、もしかしたら、自分の探している人かと、走り出して、何はともあれ下男たちを押さえて、その男を見ると、みすぼらしい姿で、腰刀と太刀を交差させて、笠を深く被り、覗き見るように座っている。「ああ、君、そこにいるのは六郎殿と見たてましたが、どうして人目を避けなされるのか。こっちに来てください、卜部殿」と言うと、その者は笠を脱ぎ、「このごろ、顔向けできぬまま、(頼光朝臣が)ご下向と聞きあまりの懐かしさに、そっとお目にかかり申し上げたいと思い、自分の身の程も忘れ、ここまで押しかけたが、この事の次第にな

此仕儀に及びぬれば、

ってしまったので、物事の順序が悪かったのだなあと、挨拶を申し上げようと

序悪しかりけりと思ひ、

罷り申さんと存じつるに、

思ったが、見つけていただいて、喜びの中にも、恥ずかしさが先行しております」

と、顔を背けて申し上げた。渡部、すぐに小部屋のある所に招き入れて、親しくも

廳て一間なる所に請じ入れて、

てなし、「本当に私の思いも通じて、こうしてお目にかかれていますことこそ本望で

ある。さぞや、この長い年月辛くお過ごしになっていただろう。想像するのも嘆か

懈く過ぐし給ひけん。

わしゅうございます。貴方のお住まいを知らなかったため、結局便りを出せなかつ

竟に音信通ぜざりしなり。

たのだ。故郷のお父上も無事でいらっしゃるが、ひたすら常に貴方のことだけを考

えています。近頃は東国におります噂を風に聞きましたままに、幸いにも下向の途

中でお探し申し上げようと配慮しました」と、父の愛慕の所存を細細と語り出した

ところ、季武が申し上げたことは、「本当に父の命令に背いてから、頭が天に触れ

「誠に父が命に背きてより、

天に踰り

ることを恐れ背を屈め、地が落ちくぼむのを恐れて抜き足で歩きながら(→肩身が

地に躓して

狭くて世を恐れ憚り暮らして)、他国に移り住み、朝から晩まで親孝行の何もせ

他国に流行し、

朝暮の定省を曠ふし、

ず、そのうえ辛い思いで老いた父を病ませる。私はこの罪に、いつ別れを告げることが出来るのだろう。不忠義と不孝は、天と地を覆い載せることが出来ないほどで

不忠不孝は

天地の覆載せざる所なり」

ある」と、自ら大いに悔いて、涙を流して申し上げたのだった。

[頼光、季武を家臣に加う]

頼光はこれこれのことをお聞きになり、急いで再会をするべき義理をおっしゃったので、渡部はたいそう喜び、すぐに卜部を連れて御前に出る。頼光は、「季武、懐かしいな。想定外にも、長く会わなかったが、不思議な再会になったこと、こ

「季武珍しや。

れは全て主従の巡り会いの一言に尽きるのではないか。今から季国が我が父に忠貞

併しながら主従の値遇尽きざり所か。

をつくしたように、お前もまた私に仕えるがいい。この上は父のお叱りが許される
とのこと、異議はないだろう。もっともこれからすぐに任国にお連れになる(？自

但し、是より直ぐに任国に召し具すべけれ共、

敬か?)つもりだが、季国の老いた命は少ししかない。早く故郷に帰って、一度父

季国が老命旦暮を待つ。

御に会って、精一杯親孝行をし、また東国に来るがいい」と言って、すぐに頼光は

則ち

季国の元へ一通のお手紙をしたため、お暇をお与えになった。季武はあまりのあり

季国が方へ一通の御消息を成され、御暇をぞ下されける。

がたさと、その身のみすぼらしくなっている恥ずかしさとに、なんと言い出した言葉もなく、御前を出発してしまった。綱も詳しい事情を一通の手紙にしたため

綱も委細に一通を認めて、

で、季国の元へと送ったのだった。

次官が許へ送りける。

こうして、頼光朝臣は上総にご下向になるので、季武はお暇をいただき、行きたがえて、摂津国へと急いだのだった。かりにも父、父となることをもって、子もまた子となる。季武は深い孝行はちょうど良い頃合いをもって、生きている間に再会を果たし、三十日余りがたって、享年七十九歳で、季国は亡くなったのだった。季武は供養を形式通りに執り行って、翌年の春にまた東国に下ったのだった。

注釈

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※壺・三島明神……静岡県三島市大宮町にある元官幣大社。祭神は大山祇神・事代主神。伊豆国一の宮。

頼光四天王二人目の勇士ト部季武の登場です。この回は読み返すたびに季武がとても情けなくて笑ってしまいます。雑人たちに本来の目的を言い出せずに盗人に間違えられてしまうなんてなんとも可愛らしいですね。現代の言葉で言うと「ヘタレ」でしょうか。私はそんな可愛らしい季武が頼光四天王の中で最も好きです。

ト部季武は弓の名手として知られ、『今昔物語』では姑獲鳥の話に登場します。いつかはその話も訳をして公開出来たらなと思います。

今回、頼光公は「寛大な人格者」として描かれていることが大変面白く感じました。江戸時代の人々の好みそうな人情を感じます。この後頼光公はさらに二人の家臣を加えますが、彼らに対しても寛大な処置をします。それがどのような処置かはまたのお楽しみということで。感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3
海熊童子